

Chronic spontaneous urticaria: Implications of subcutaneous inflammatory cell infiltration in an intractable clinical course

伊藤, 絵里子

<https://doi.org/10.15017/2556280>

出版情報 : 九州大学, 2019, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名：伊藤 絵里子

論 文 名：Chronic spontaneous urticaria: Implications of subcutaneous inflammatory cell infiltration in an intractable clinical course

(病理所見から見た特発性の慢性蕁麻疹一皮下の炎症細胞浸潤と治療反応性の相関について一)

区 分：乙

論 文 内 容 の 要 旨

日常診療では蕁麻疹の組織学的検査を行うことは少ない。しかし特発性の慢性蕁麻疹においては、蕁麻疹様の臨床像を示す疾患の鑑別や病態を考慮するため、組織学的検査が有用な場合がある。これまで特発性の慢性蕁麻疹の治療反応性と病理所見との関係については検討されていなかった。そこで、皮膚生検を施行した特発性の慢性蕁麻疹 36 例について、good responder; 内服治療なしで 3 か月以上寛解状態を維持できている症例、poor responder; 寛解しても 3 か月未満で再燃してしまう症例や寛解に至らない症例として、治療反応性の良悪と病理所見の間に相関する項目がないかを研究した。

臨床所見の項目は、年齢・性別・生検時の罹病期間・合併症の有無・前治療【H1 抗ヒスタミン剤、ステロイド内服、特に治療なし】・当科での治療【H1 抗ヒスタミン剤(通常量で単剤使用、高容量で多剤併用)、抗ロイコトリエン薬、H2 抗ヒスタミン剤、ステロイド内服】として、病理所見は浮腫の程度【mild、severe】・炎症細胞浸潤の様式【血管周囲性、血管周囲+間質】・炎症細胞浸潤の範囲【真皮内のみ、真皮+皮下脂肪織】・好中球数【 ≥ 10 /HPF, < 10 /HPF】・好酸球数【 ≥ 10 /HPF, < 10 /HPF】とした。これらの項目と治療反応性との関連について統計学的解析を行ったところ、病理学的に細胞浸潤が真皮のみならず皮下にも及んでいる症例では、治療反応性が乏しい傾向を認めた。組織学的に細胞浸潤の深い症例では、標準的な治療への反応性が乏しい可能性があると考えた。